

2005 Yu - pal
せらぎスクールinゆうべつ川

報告書



遊ぶ・学ぶ川の学校

- 主 催
- ゆうべつアウトドアクラブYU - PAL
- 湧別川のサクラマスを考える会
- 遠軽町河川愛護少年団 川の学校
- ユニオンデーターシステム(株)

目 次

1. 水生動物

1 - 1 調査期日	2
1 - 2 調査位置	2
1 - 3 調査方法	2
1 - 4 調査結果	4

2. 水 質

2 - 1 採水日時	1 1
2 - 2 採水場所	1 1
2 - 3 調査方法	1 1
2 - 4 調査項目	1 4
2 - 5 調査結果	1 5

3. ま と め



1 . 水生動物

1 - 1 調査期日
平成 1 7 年 8 月 2 8 日

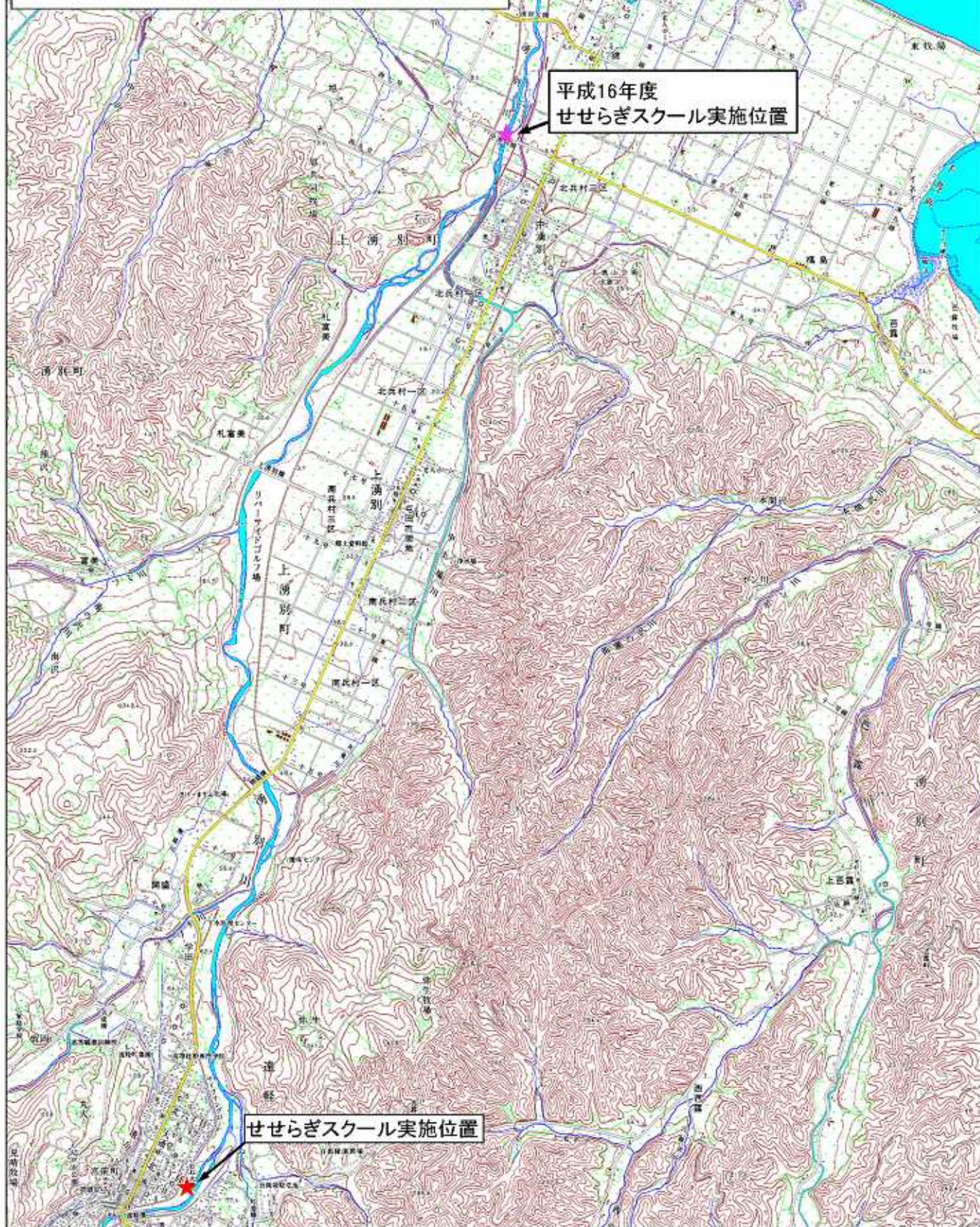
1 - 2 調査位置
いわね大橋 (図 1 . 2 - 1 参照)

1 - 3 調査方法
1) 魚類
投網, タモ網, サデ網, カゴ網, 電気ショッカー

2) 底生動物
タモ網, サーバーネット



YU-PAL 図1.2-1
 せせらぎスクール in ゆうべつ川
 — もっと知りたい湧別川 —
 湧別川せせらぎスクール実施位置
 1/100,000
 0m 2000 4000 6000
 (出典: 国土地理院1/50,000数値地図)



調査結果

・魚 類

北海道には約 60 種の魚類が生息し、湧別川では 35 種の生息が確認されています。

今回の調査では 6 科 10 種の魚類を確認しました。

湧別川で生息が確認されている種一覧に今回と前回の調査で確認した魚類の一覧を表 0-1 に示しました。

表 0-1 湧別川における生息種と本調査の確認種一覧

No.	科	種	H16	H17
1	ヤツメウナギ	スナヤツメ		
2		シベリアヤツメ	○	○
3		カワヤツメ		
4	コイ	コイ		
5		ギンブナ		
6		ヤチウグイ		
7		マルタ		
8		エゾウグイ	○	○
9		ウグイ	○	○
10	ドジョウ	ドジョウ		
11		フクドジョウ	○	○
12	キュウリウオ	キュウリウオ		
13		ワカサギ		
14	シラウオ	シラウオ		
15	サケ	オショロコマ		
16		アメマス(エゾイワナ)		○
17		サケ		
18		カラフトマス		
19		サクラマス(ヤマメ)		○
20		ニジマス		○
21	サヨリ	サヨリ		
22	トゲウオ	降海型イトヨ		
23		トミヨ		
24		エゾトミヨ		
25		キタノトミヨ	○	○
26	カジカ	ハナカジカ	○	○
27		エゾハナカジカ		
28	ボラ	メナダ		
29	ハゼ	シマウキゴリ		
30		ウキゴリ	○	
31		ジュズカケハゼ	○	
32		アシシロハゼ		
33		ルリヨシノボリ	○	
34		ヌマチチブ		○
35	カレイ	ヌマガレイ		
計	12	35	9	10

網走開発建設部ホームページ
水辺の国勢調査(平成9年度)
より抜粋 一部改変

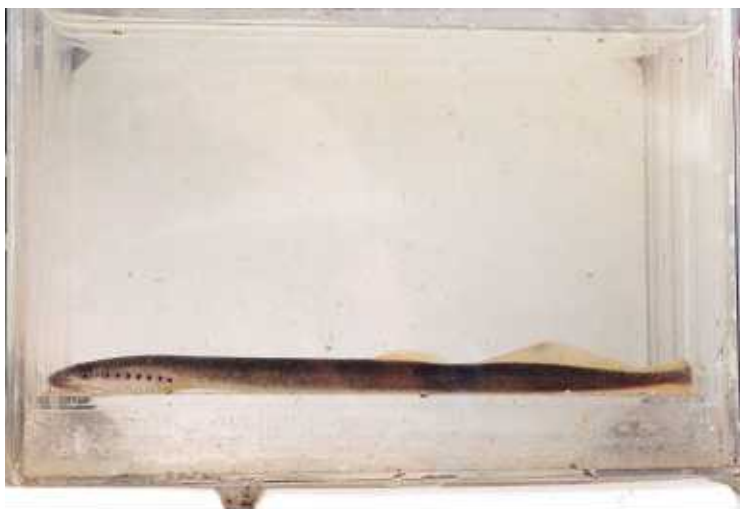
今回捕獲した魚類の生態については次のとおりです。

- ・シベリアヤツメ

国内では北海道のみに生息し特に太平洋側南西部およびオホーツク海側に局所的に生息しています、生息数はそれほど多くありません。

幼魚（アンモシーテス幼生）は、砂泥中に潜って生活し主に有機物を食べます。幼生期を3～4年過ごした後、夏の終わりに秋にかけて変態し成魚は餌をとらずそのまま越冬し翌年雪解け水の収まる5～6月頃に産卵して一生を終えます。

環境省レッドデータブックの準絶滅危惧種，北海道レッドデータブックの希少種に指定されている。本調査では3尾を平瀬で捕獲しました。



- ・エゾウグイ

国内では、青森、秋田、岩手、福島などの比較的大きな河川の上流部にわずかに分布しています。

北海道では、道南の一部を除き道内全域の河川や湖沼にごく一般的に生息し、川の上流域から下流域まで広い範囲に生息していますが、主に中流域の緩流部や淵を好みます。

北海道レッドデータブックで留意種に指定されていますが、本調査では投網で多く捕獲しました。



- ・ウグイ

ほぼ日本全国に分布しますが四国の瀬戸内側の一部と琉球列島にはいません。一生を河川など淡水で過ごす型と降海型に区分され、淡水型は河川の上流域から河口域や山あいの湖沼などに広く分布し、他の魚が住めないようなpH3という強酸性の水域でも生息できます。

河川では主に淵に住みますが、群れで平瀬に出て石に付着した藻類や水生昆虫をついばむことが多く、本調査では投網とタモ網、カゴ網のいずれでも多く捕獲しました。



- ・フクドジョウ

国内では北海道のみに生息する固有種で、河川の流程全体にごく一般的に見られ多様な環境に生息しています。

特に水の澄んだ河川の中流域から上流域で瀬の中の石や砂礫の川底で水生昆虫を好んで食べ、本調査では投網とタモ網のいずれでも多く捕獲しました。



- ・アメマス

日本海側は山形県以北、太平洋側は千葉県以北に分布し、降海型（アメマス）と陸封型（エゾイワナ）に分かれます。

一般的に最高水温 20 度以下の平地の渓流域に生息しています。本調査では投網でいわね橋橋脚付近の大型淵で 3 尾を捕獲しました。



- ・ヤマメ

川の上流域から下流域まで広く生息し清流で、真夏でも水温が 20 度を越えない場所を好みます。

サケやカラフトマスよりも上流に遡上して産卵し、孵化後 1 年間を河川で生活し翌年の 4 月～ 6 月に稚魚が降海します。

北海道レッドデータブック希少種に指定され、本調査ではいわね橋橋脚付近の大型淵で多く捕獲しました。



- ・キタノトミヨ

北海道北部・東部と石狩川流域の湿原を緩やかに流れる川の中・下流域や湖沼に多く生息しています。特に岸寄りの水草が多く繁茂している場所を好んで生息し水中の根に巣をつり産卵します。

本調査では河岸部の抽水植物帯で10尾を捕獲しました。



- ・ハナカジカ

本種は河川の中・上流域で平瀬の石礫底などに多く生息し、近年日本の固有種であることが明らかになりました。水質が比較的きれいな川を好み石の下や川底のくぼみで生活しています。

肉食性で水生昆虫や小型の魚、エビなどを食べます。

北海道レッドデータブック留意種に指定され、本調査では河岸部の瀬で1尾を捕獲しました。



- ・ニジマス

原産地は北アメリカで日本へは明治初期に初めて移植された外来種で、北海道では釣の対象として湖沼や河川に放流されたものが自然産卵により繁殖していて在来種の生態に及ぼす影響が心配されます。

水生昆虫や小型の魚などを好んで食べ大きなものでは60センチ以上にもなり体の側面に幅広い赤虹色の帯があるのが特徴です。小黑点が全身やヒレに散在していて、幼魚では小判型斑紋（パーマーク）がありヤマベに似ていますが背ヒレにも小黑点があるため区別できます。本調査ではいわね橋橋脚付近の大型淵で3尾を捕獲し、同じ場所で捕獲した同体長のヤマベやイワナに比較して3～5倍の量の餌（カゲロウ類）を捕食していました。



- ・ヌマチチブ

日本では北海道から九州に分布し海外では朝鮮半島と中国に分布しています。川の中流から下流や川の水（真水）と海水（塩水）とが交じり合う汽水域、ため池や湖などさまざまな場所に生息し流れのないゆるやかなところを好み、石に付いたコケや底生動物などを食べます。

本調査では河岸部の植生帯付近で1尾を捕獲しました。



底生動物

- ・今回の調査では、以下に示す 19 科 32 種の底生動物を確認しました。
これに去年までの確認種数 30 種を加えると経年確認種数が 19 科 36 種となりました。

表 0-2 確認種一覧

目名	科名	種名	H16	H17
カゲロウ	マダラカゲロウ	アカマダラカゲロウ	○	○
		オオクママダラカゲロウ	○	○
		シリナガマダラカゲロウ	○	
		トウヨウマダラカゲロウ	○	○
	コカゲロウ	シロハラコカゲロウ	○	○
		コカゲロウの一種	○	○
		ヨシノコカゲロウ	○	○
		サホコカゲロウ	○	○
		フタバコカゲロウ	○	○
	ヒラタカゲロウ	タニガワカゲロウの一種	○	○
		ナミヒラタカゲロウ	○	○
		エルモンヒラタカゲロウ	○	○
		ヒメヒラタカゲロウ	○	○
	フタオカゲロウ	マエグロヒメフタオカゲロウ	○	○
		フタオカゲロウの一種	○	○
	モンカゲロウ	モンカゲロウ	○	○
	サナエトンボ	サナエトンボの一種	○	○
		モイワサナエの一種		○
ヘビトンボ	センブリ	センブリ		○
トビケラ	ヒゲナガカワトビケラ	ヒゲナガカワトビケラ	○	○
	ナガレトビケラ	ヒロアタマナガレトビケラ	○	○
		ムナグロナガレトビケラ	○	○
	コエグリトビケラ	ヒラタコエグリトビケラ	○	○
	エグリトビケラ	トビモンエグリトビケラ属の 1 種		○
	カクツツトビケラ	コカクツツトビケラの一種	○	○
	ヤマトビケラ	ヤマトビケラの一種	○	○
	シマトビケラ	コガタシマトビケラ	○	
		ウルマーシマトビケラ	○	○
双翅目	オナシカワゲラ	ユビオナシカワゲラの一種	○	○
	ガガンボ	ウスバヒメガガンボの一種	○	○
	ブユ	ブユの一種	○	○
	ユスリカ	ユスリカの一種	○	○
甲虫目	ヒメゲンゴロウ亜科	モンキンマメゲンゴロウ		○
その他		モクズガニ	○	
		ヨコエビの一種	○	○
		スジエビ	○	○
		ヒラマキガイの一種	○	○
		モノアラガイの一種		○
5目 19科 36種			30	32

- ・確認した底生動物を環境省全国水生生物調査の水質階級に分けて整理しました。
- ・この結果、きれいな水に生息する種としてカワゲラ, ナガレトビケラ, ヒラタカゲロウ, ブユ, ヘビトンボ, ヤマトトビケラが確認され、少しきたない水に生息する種としてコガタシマトビケラ, スジエビが確認されました。
- ・きたない水並びに大変きたない水に生息する種は確認されませんでした。

このことから、この調査地点の水質は水質階級()に属し概ね「きれいな水」でした。

これを去年の調査結果と比較してみると、()きれいな水に該当するヘビトンボ1種が増加していることから、今回の調査地点の水質は去年の調査地点(湧別橋)よりもきれいな水であるといえます。

表 0-3 確認種の水質階級判定

○：採集された種

●：採集された数が多かった種

きれいな水	H16 出現	H17 出現	少しきたない水	H16 出現	H17 出現	きたない水	H16,H17 出現	大変きたない水	H16,H17 出現
アミカ			イシマキガイ			イソコブムシ		アメリカザリガニ	
ウズムシ			オオシマトビケラ			タイコウチ		エラミズ	
カワゲラ	○	○	カワナ			タニシ		サカマキガイ	
ザワガニ			ゲンゴボタテ			コボンドロヨコエビ		セスジユリカ	
ナガレトビケラ	○	○	コオニヤンマ			ヒル		チョウバエ	
ヒラタカゲロウ	●	●	コガタシマトビケラ	●	●	ミズカマキリ			
ブユ	○	○	スジエビ	○	○	ミズムシ			
ヘビトンボ		○	ヒラタドロムシ						
ヤマトトビケラ	○	○	ヤマトシジミ						
概の水質階級									

環境省ホームページ
 全国水生生物調査
 水質階級と指標生物より転載
<http://mizu.nies.go.jp/suisei/chosa/about.html>



水 質

・採水日時

平成 17 年 8 月 27 日 15:00

平成 17 年 8 月 28 日 12:30 ~ 14:00 (水質パックテスト)

・採水場所

下記の 9 地点で採水を行いました。(図 2.2-1、図 2.2-2 参照)

中土場川	-----	湧別川合流前
ヌッポコマナイ川	-----	中土場川合流前
富美川	-----	湧別川合流前
杜名淵川	-----	湧別川合流前
湧別川上流地点	-----	生田原川合流前
旧中土場川	-----	湧別川合流地点直下
湧別川下流地点	-----	旧中土場川合流前
旧中土場川	-----	湧別川合流前
生田原川	-----	湧別川合流前

調査方法

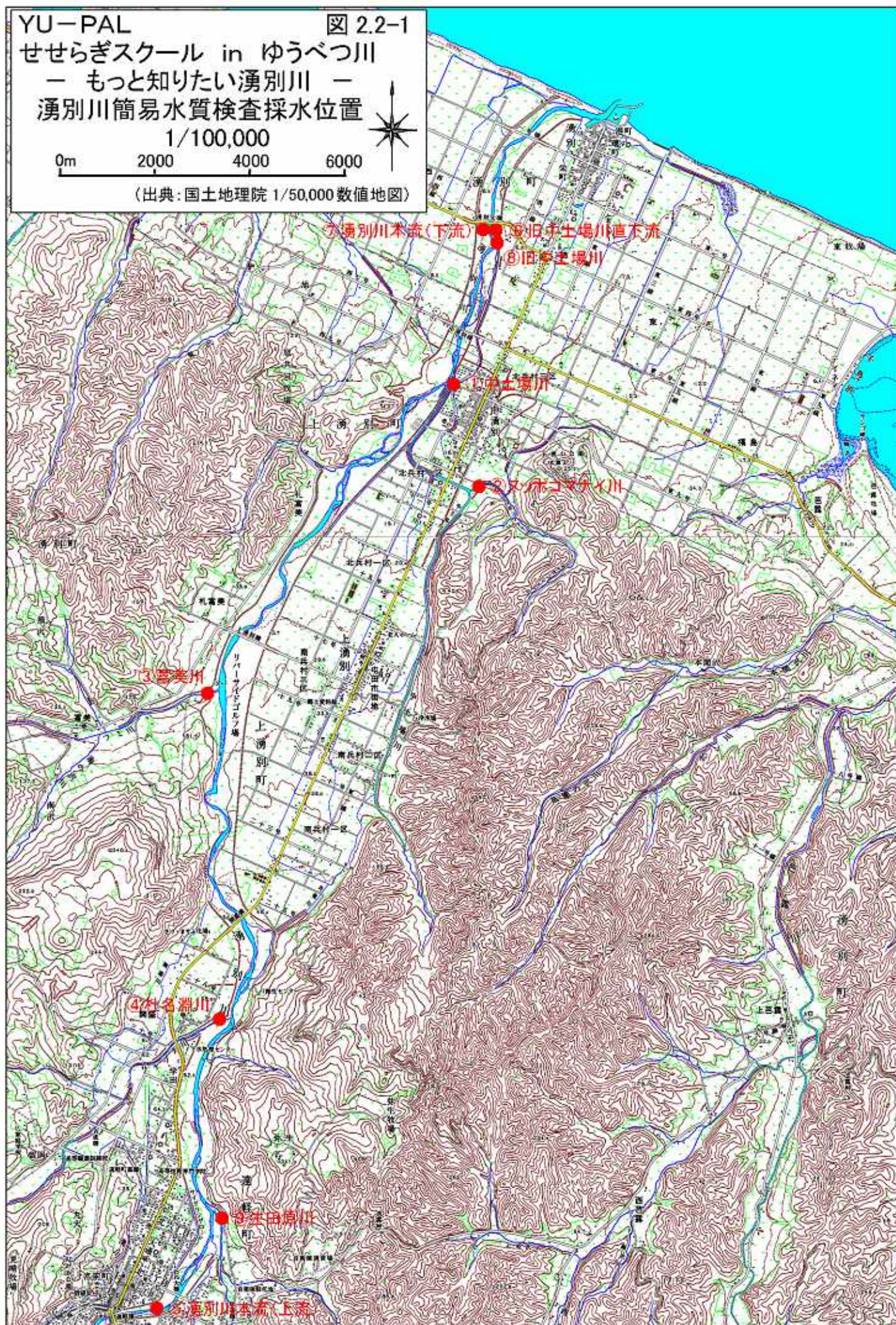
- ・今回の調査は、8 月 28 日 12:30 ~ 14:00 に、(株)共立理化学研究所製のパックテスト(簡易水質検査機器)を使用して行いました。

なおパックテストは簡易水質検査であり、検査時間、採水量、操作手順、共存している各種元素やイオン、操作手順等の影響を受けるため誤差が出る可能性はありますが、各地点ごとの相対的な比較および水質の異常の有無は十分に判断できると考えられます。

今回の調査は、午前中に一度パックテストで測定を行い、その後参加者にもパックテストで実際に水質をチェックしてもらいました。

なお今回の報告は、最初に測定した値で作成しています。





調査項目

- ・今回は下記の 9 項目について調査しました。
 - ～ の項目は、調査地点の間の差異を見るために今年も調べました。
 - ～ の項目は平成 15 年度から実施している項目です。
 - 、 、 はタンパク質などが分解されるときに生成される物質で下記のとおりお互いに関連しています。

アンモニウム体窒素 → 亜硝酸体窒素 → 硝酸体窒素

、 は過去の肥料の大量使用により土中に含まれている窒素の量が増え過剰となった窒素分が水に溶け込んで地下に浸透し、地下水を汚染しているとして最近問題となってきました。また のリン酸については肥料からの供給も考えられます。

- ・これら、窒素、リンは河川や湖沼などで問題となっている富栄養化の原因物質として考えられており今後とも監視していく必要性が高いと思われます。

No,	項目	内容
	水素イオン濃度 (pH)	川の水の状態を調べます。 酸性・中性・アルカリ性をチェック 中性なら 7 位になります
	化学的酸素要求量 (COD)	水の中に入っている汚れ成分(有機物)の量を調べます。水の汚れ具合をチェックします。
	全硬度	水の中に溶けているカルシウムとマグネシウムの量を調べます。ミネラルウォーターの軟水・硬水はこの数字からきめられます。
	亜鉛	亜鉛という金属は人に対しては影響が僅かですが、植物や微生物、魚に対してはかなり強い影響を与えます。
	亜硝酸 / 亜硝酸体窒素	牛、馬、人間などが川の水を汚しているか調べます。
	硝酸 / 硝酸体窒素	
	リン酸 / リン酸体リン	
	アンモニウム / アンモニウム体窒素	
	界面活性剤	食器洗いや洗濯などに使っている合成洗剤に入っていて、人間が川の水を汚しているか調べます。

調査結果

- ・今回の調査結果は次のとおりで、CODについて2種類で調査を行いました。
- ・低濃度のCODのパックテストでは定量できる範囲を超える地点が多いため、通常のCODパックテストのデータで解析しました。

表 0 - 1 水質調査結果一覧

項目\調査地点	中土場川	スッポコマナイ川	富美川	杜名淵川	湧別川 (上流)	旧中土場川 流入点直下	湧別川 (下流)	旧中土場川	生田原川
pH	7.0	7.0	7.0	7.0	7.5	6.5	7.0	6.5	7.0
COD (低濃度) COD mg O/L	4	>8	>8	>8	4	4	4	>8	6
COD COD mg O/L	8	10	13	10	5	6	5	>100	8
全硬度 mg CaCO ₃ /L	75	50	50	50	50	70	50	100	50
亜鉛 mg Zn/L	0	0	0	0	0	0	0	0	0
亜硝酸 mg NO ₂ -/L	0.02	0.20	0.05	0.10	0.02	0.02	0.02	0.02	<0.02
硝酸 mg NO ₃ -/L	2	5	1	1	1	2	2	1	1
リン酸 mg PO ₄ -/L	0.2	0.2	0.2	0.5	<0.2	<0.2	0.2	10.0	0.2
アンモニウム mg NH ₄ +/L	0.2	0.2	0.2	1.5	0.2	1	0.2	5.0	0.2
界面活性剤(陰イオン) mg NaO ₃ SO(OH) ₂ 110-8/L	1	1.5	2	1	1	1	1.5	1	2

- 注) 1.本調査は、株式会社リサーチ研究所製のパックテスト(簡易水質検査機器)により実施した。
2.亜硝酸は亜硝酸ベースでの値であり、亜硝酸体窒素ベースにする場合は換算する必要がある。
3.硝酸は硝酸ベースでの値であり、硝酸体窒素ベースにする場合は換算する必要がある。
4.リン酸はリン酸ベースでの値であり、リン酸体リンベースにする場合は換算する必要がある。
5.アンモニウムはアンモニウムベースでの値であり、アンモニウム体窒素ベースにする場合は換算する必要がある。
6.標準色との比較で中間になった場合は、平均または推定値で記載している。

- ・表 0 - 1 水質調査結果一覧の中で低濃度のCOD以外の項目で定量限度を越えている地点(旧中土場川のCOD)があり、これらについては「> : 以上」で表現しています。
- ・また0ではなくて、検出できる値よりも少ない項目については、「< : 以下」で表現しています。
- ・また亜硝酸および硝酸等については、窒素単体の量ではなく、全体としての量として記述しています。



各調査項目の状況および前年度調査結果との比較を以下に示します。

水素イオン濃度

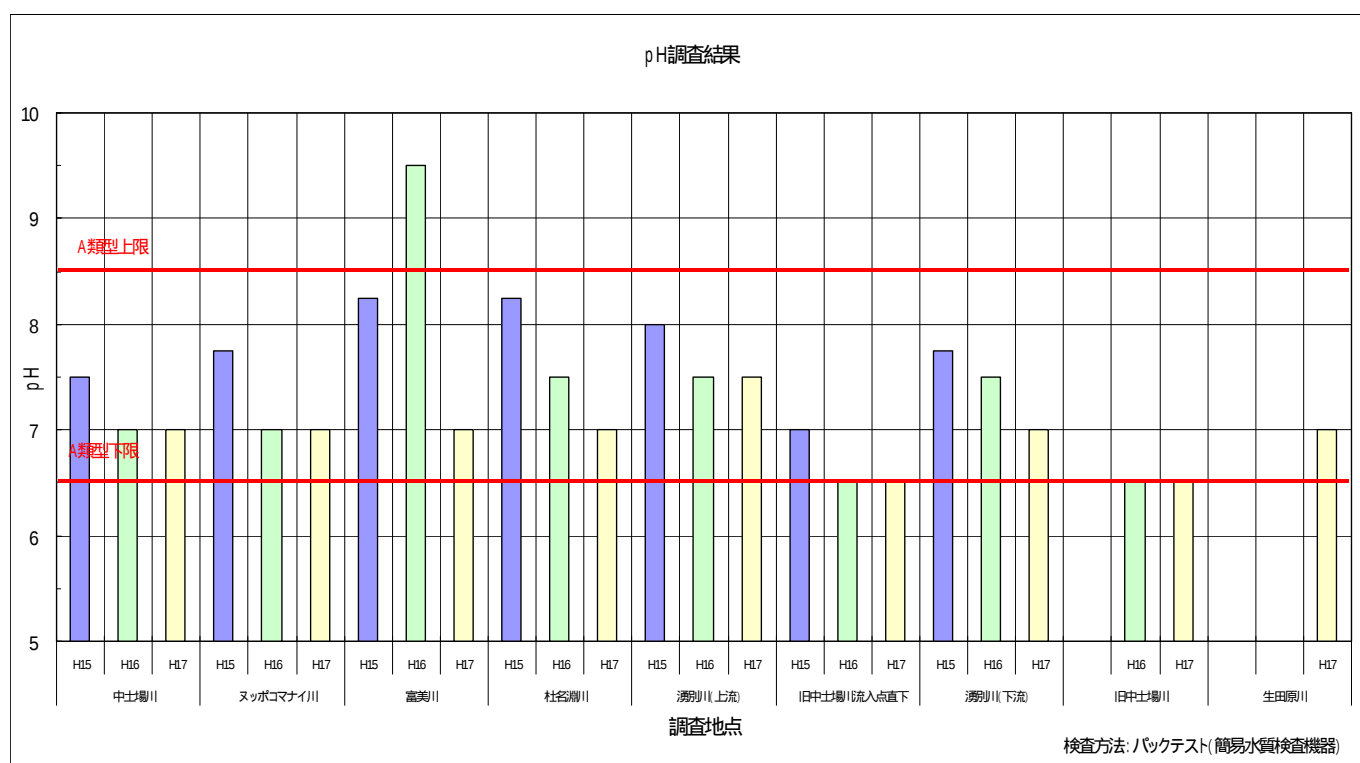


図 0-1 各地点における水素イオン濃度
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・湧別川では、河川の水域指定が行われており、支湧別川合流点及び丸瀬布取水口から下流についてはA類型となっています。
- ・A類型では、pHは6.5以上、8.5以下となっており、今回の調査では、旧中土場川流入点直下と旧中土場川が6.5と若干低めですが、全地点とも範囲内の値となっています。
- ・一般的にpHは地質の影響を強く受けており、排水などの人為的な影響によっても変わることがあります。
- ・また、夏場には水中の溶存酸素量が減少すること、植物プランクトンや藻類の光合成の影響により水素イオン濃度が高くなる（アルカリ側に推移）することが知られています。

化学的酸素要求量（COD）

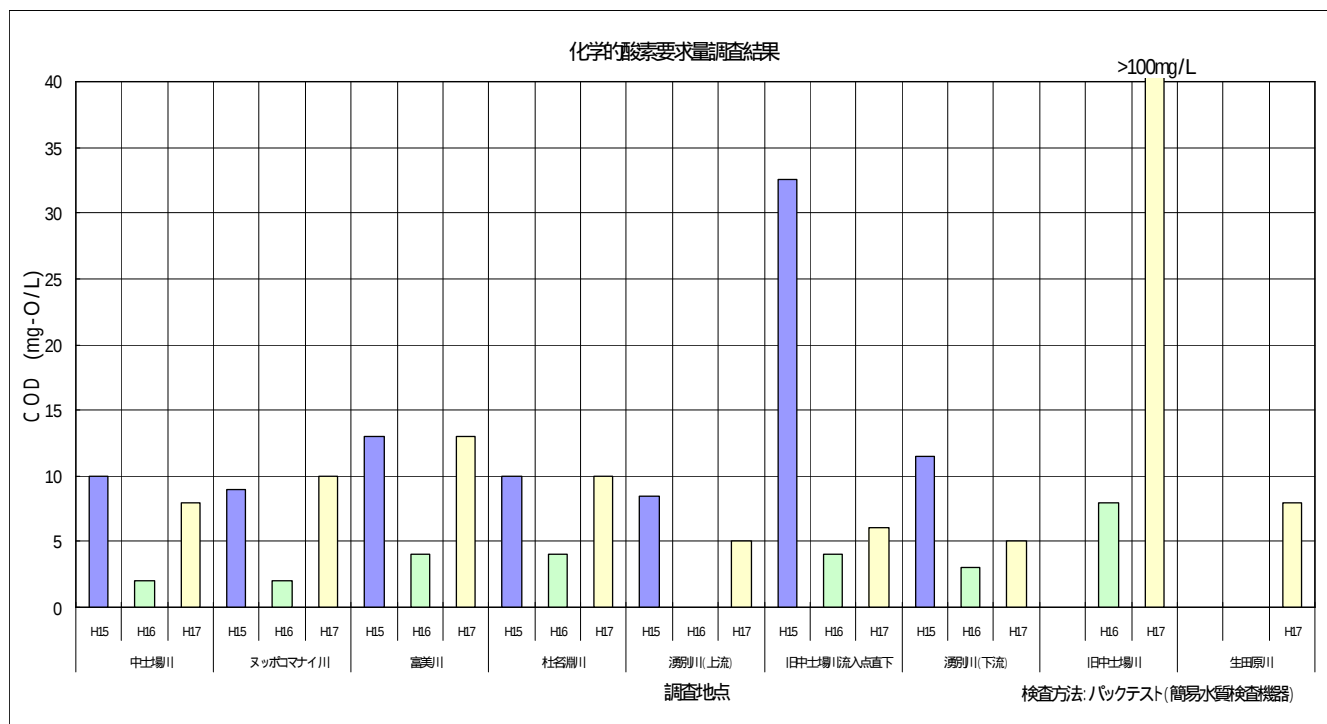


図 0-2 各地点における化学的酸素要求量
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・CODの調査では、水中に含まれている有機物や各種イオンを強制的に薬品で酸化させ水中に含まれている物質の量を調べます。
- ・河川ではCODの規制値はありません。
- ・今回の調査結果では、旧中土場川の値が 100mg/L 以上と最も高く、人為的な汚濁が懸念されます。
- ・前年度の値と比較してみると、全体的に今回の値が高くなっていますが、採水前の降雨等の影響が考えられます。
- ・なお今年度は低濃度用のキットと高濃度用のキットの両方で測定してみましたが、一部の調査地点で若干差違はありますが、概ね近い値となっています。
- ・平成 17 年度における中湧別橋の値（網走開発建設部 管内一級河川水質速報値）を見てみると、4～7月で 3.0～4.6mg/L であり、周辺に位置している調査地点 湧別川下流は同程度か若干高い値となっています。
- ・また遠軽町の遠軽橋では、3.2～3.6mg/L となっています。

全硬度

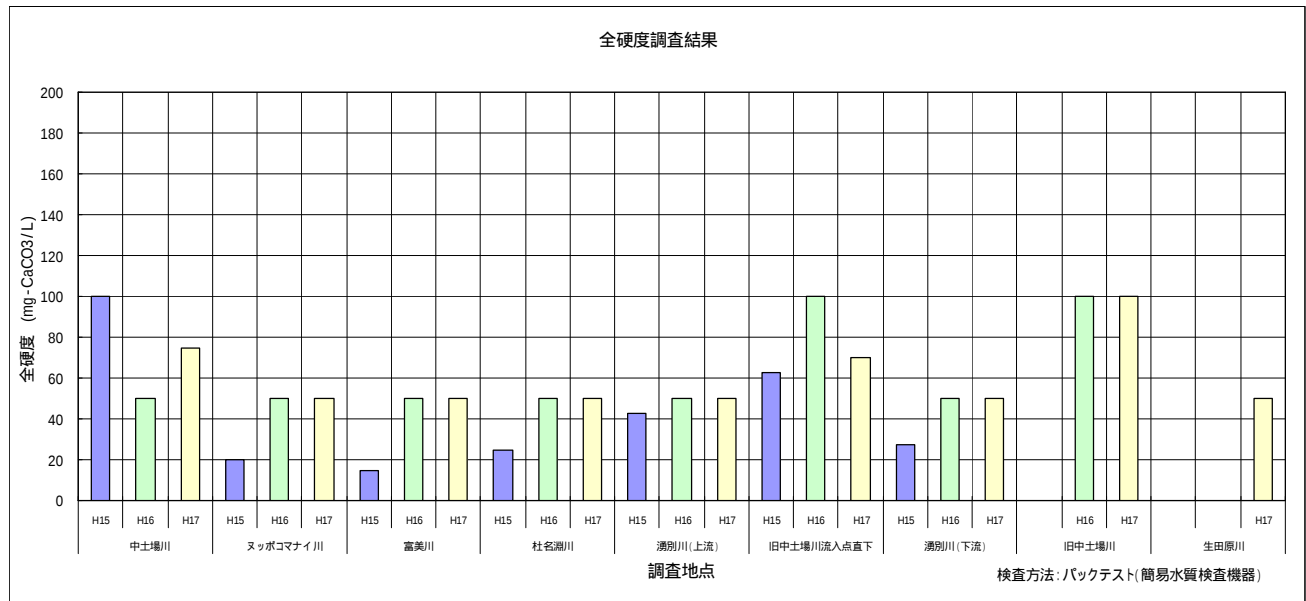


図 0-3 各地点における全硬度
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・ ヌッポコマナイ川～ 頓別川上流および湧別川下流、生田原川は 50ppm であり、大きな差は見られませんでした。一方、中土場川、旧中土場川および旧中土場川直下は他地点の 1.5～2 倍の 70～100ppm となっており、地質、工場排水、下水、海水等による影響が考えられます。



亜鉛

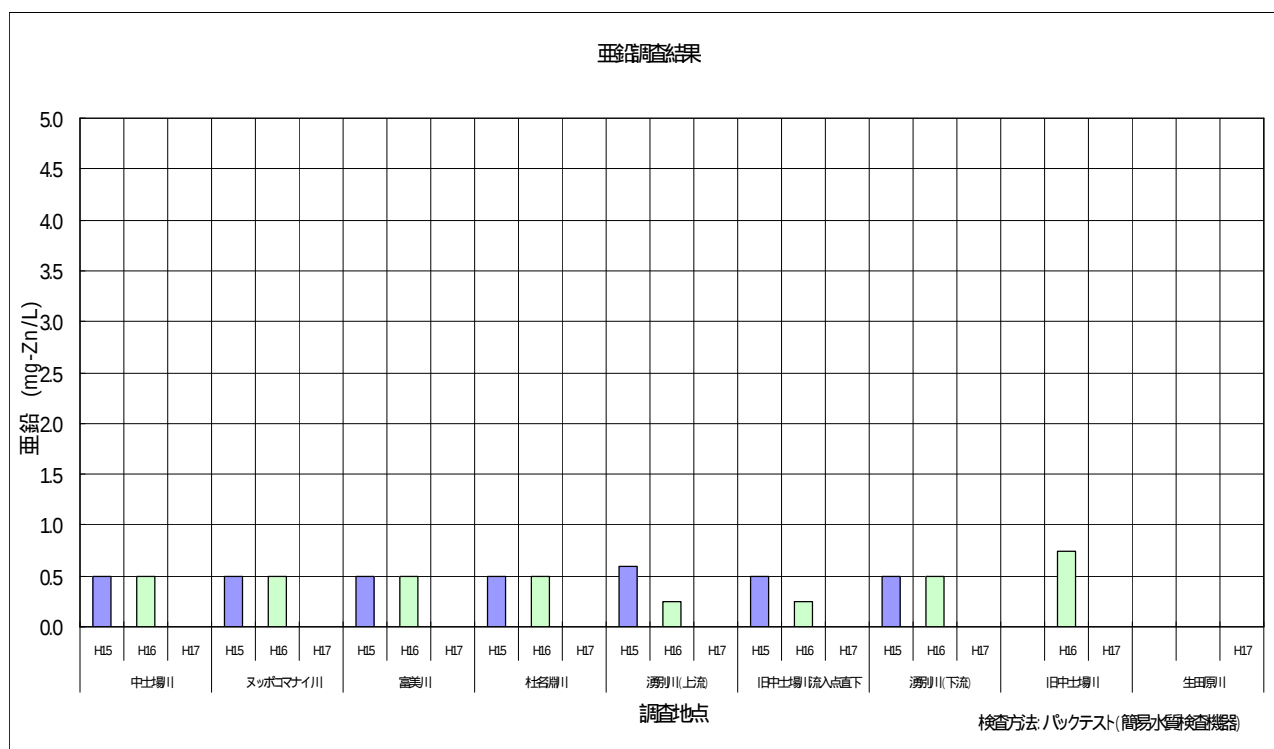


図 0-4 各地点における亜鉛
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・亜鉛については人類に対する影響よりも、植物や魚類に対する影響が強く、新たに環境省で水生生物の保全のための環境基準が設定されました。(0.03mg/L 以下)
- ・今回の調査結果は、全地点とも 0 mg/L であり、バックテストでの検出限界以下となりました。
- ・前年度までと比べると低くなっています。
- ・平成 17 年度における中湧別橋の値(網走開発建設部 管内一級河川水質速報値)を見ると、5 月で 0.009mg/L となっています。
- ・同じく遠軽橋では、5 月で 0.013mg/L となっています。

亜硝酸

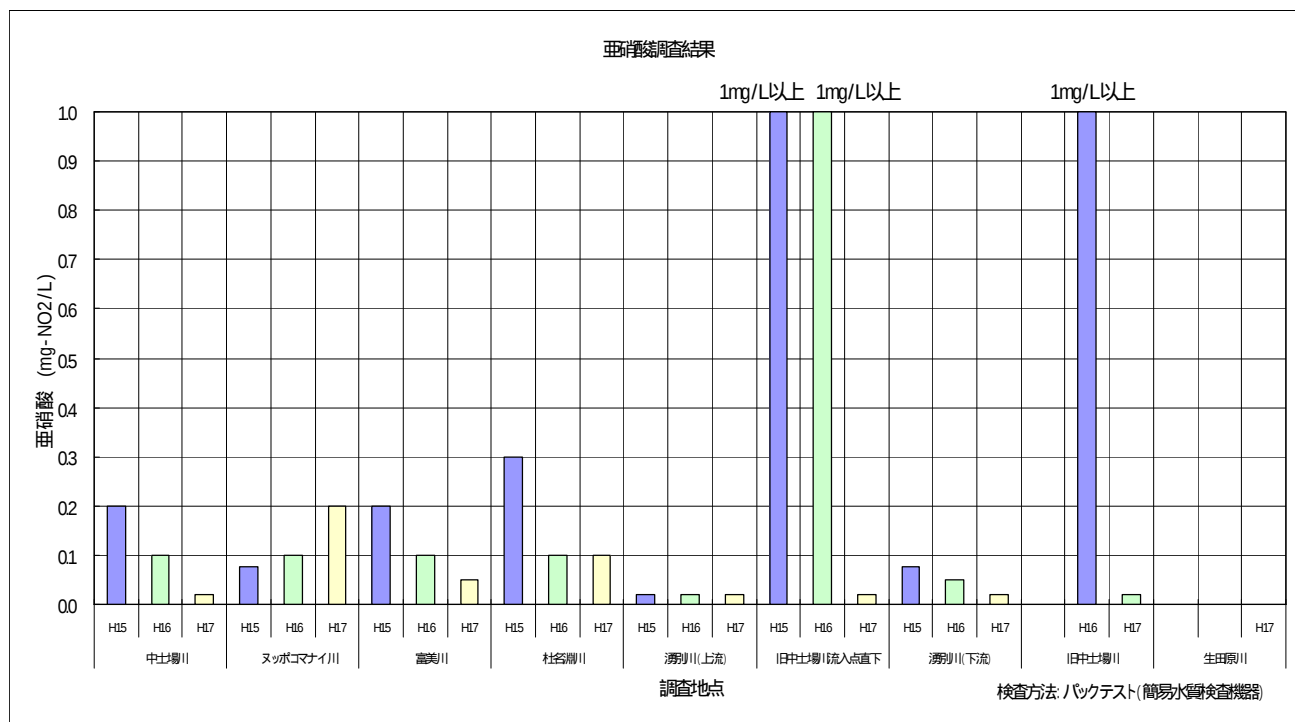


図 0-5 各地点における亜硝酸
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・今回の調査結果では、スッポコマナイ川と社名淵川の値が 0.1～0.2mg/L と他地点よりも高くなっており、人為的な影響が懸念されます。
- ・その他の地点では、0.02 未満～0.05mg/L となっています。
- ・前年度までの値と比較してみると、スッポコマナイ川を除くと、同程度か低下傾向となっています。
- ・平成 17 年度における中湧別橋の値（網走開発建設部 管内一級河川水質速報値）を見ると、4～7 月における亜硝酸態窒素で 0.001～0.009mg/L となっています。この値を硝酸に換算すると 0.003～0.030mg/L となり、周辺に位置している調査地点である 湧別川下流と同程度となっています。

硝酸

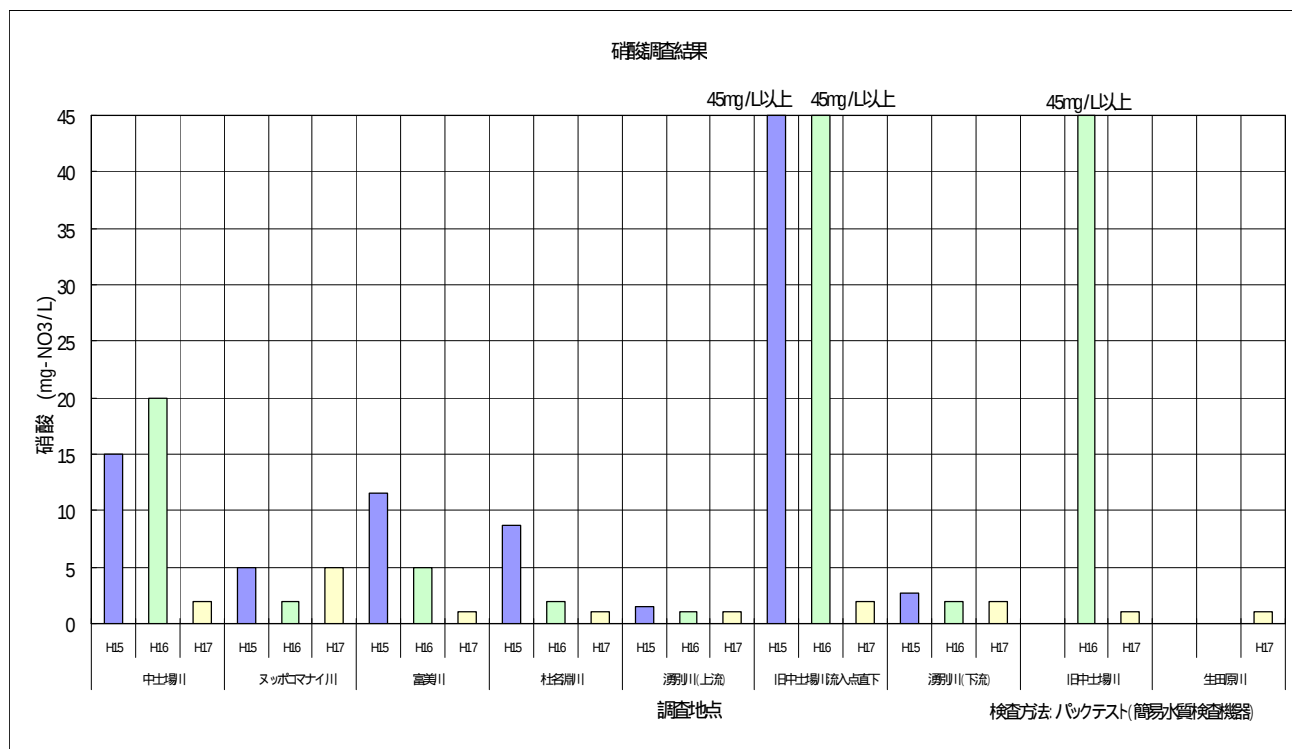


図 0-6 各地点における硝酸
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・調査結果では、ヌッポコマナイ川が亜硝酸と同じく他地点よりも若干高くなっており人為的な影響が懸念されます。
- ・それ以外の地点では 1～2 ミリグラム/L となっています。
- ・前年度の値と比較してみると、中土場川、富美川では前 2 年間に比べて低くなっています。
- ・平成 17 年度における中湧別橋の値(網走開発建設部 管内一級河川水質速報値)を見てみると、4～7 月における硝酸態窒素で 0.24～0.62mg/L となっています。この値を硝酸に換算すると 1.06～2.74 mg/L となり、周辺に位置している調査地点 湧別川下流はこの範囲内の値となっています。

リン酸

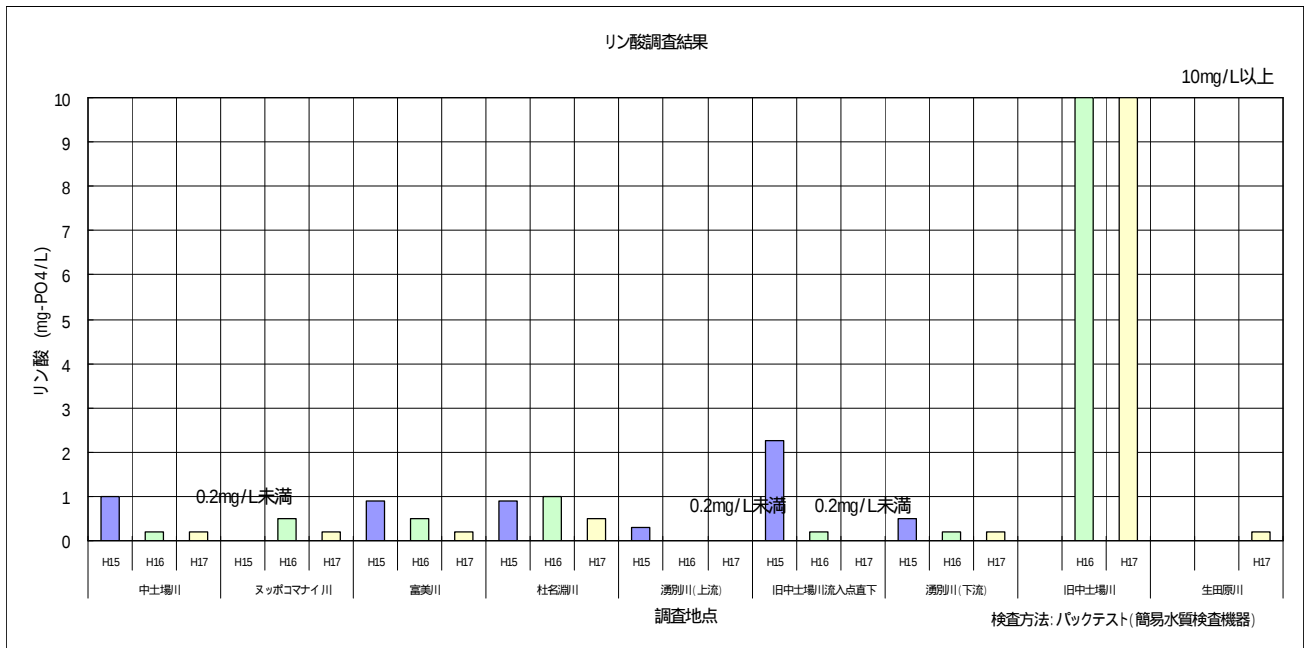


図 0-7 各地点におけるリン酸
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・調査結果では、旧中土場川本流の値が異常に高く、人為的な汚濁が懸念されます。
- ・その他の地点では社名淵川の値が若干高くなっていますが、その他の地点では 0.2mg/L 未満 ~ 0.2mg/L となっています。
- ・湧別川本流では上流よりも下流の値が高くなっています。

アンモニウム

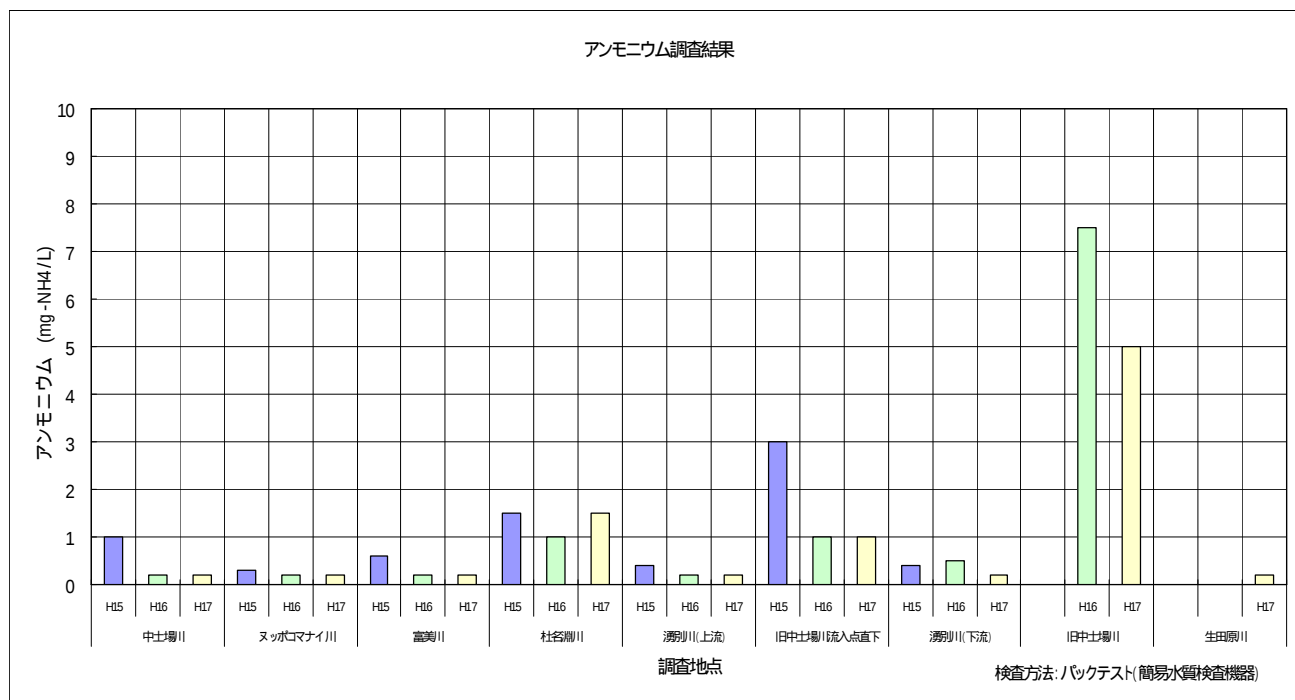


図 0-8 各地点におけるアンモニウム
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・調査結果では、リン酸と同じく 旧中土場川本流の値が高く、人為的な汚濁が懸念されます。
- ・その他の地点では、社名淵川と 旧中土場川流入点直下の値が他の地点と比べて高くなっています。
- ・前年度の値と比較すると、今回の値は全体的に小さい傾向が見られます。
- ・平成 17 年度における中湧別橋の値（網走開発建設部 管内一級河川水質速報値）を見ると、4～7 月におけるアンモニウム態窒素で 0.02 未満～0.05mg/L となっています。
- ・この値をアンモニウムに換算すると 0.02 未満～0.06mg/L となり、周辺に位置している調査地点 湧別川下流の方が高い値となっています。

界面活性剤

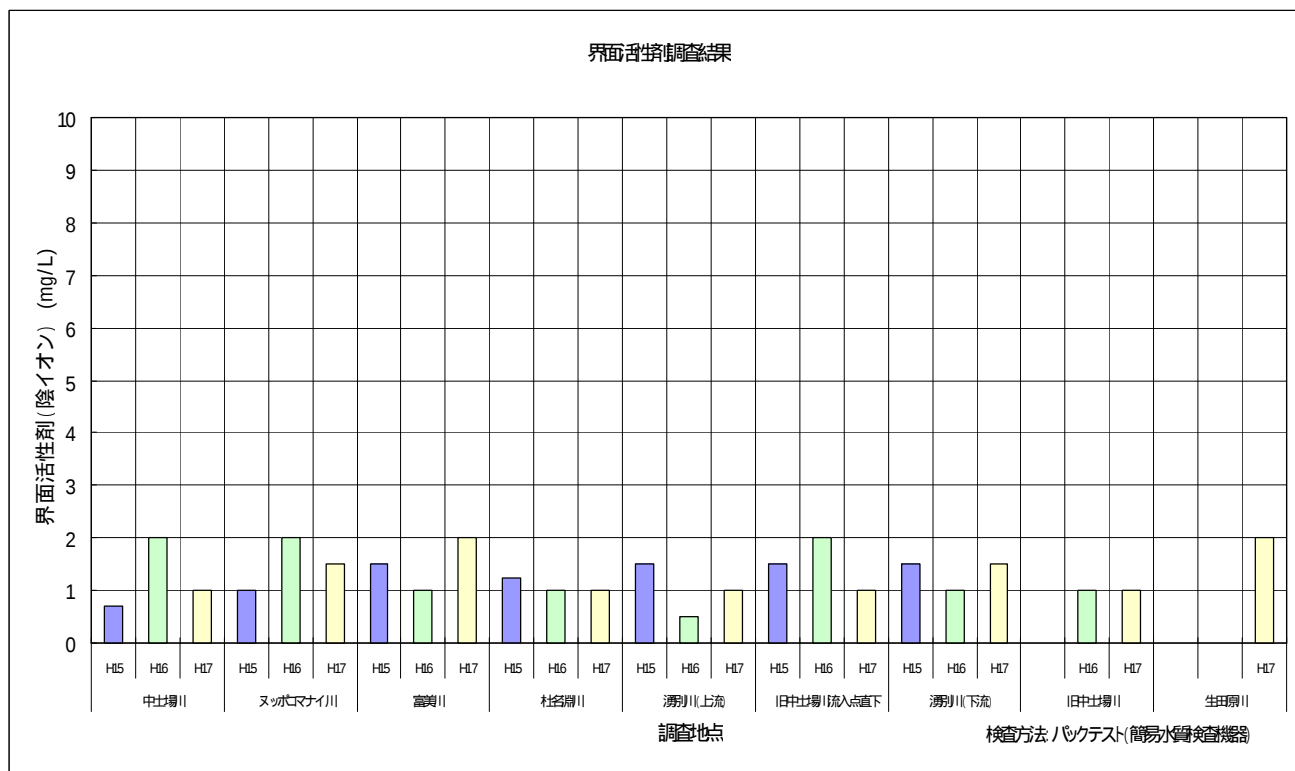


図 0-9 各地点における化学的酸素要求量
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・各地点間では大きな差は認められませんでしたでしたが、値が通常考えられない位高くなっており、調査時の操作的に問題があったかあるいは河川水中に含まれている量が少なすぎてパックテストで検出できる範囲が対応していなかったためと思われます。
- ・網走開発建設部で調査している中湧別橋では 5 月で 0.07mg/L となっていて、今回の調査結果はその値と比較してかなり高くなっています。

亜硝酸性及び硝酸性窒素

今回の亜硝酸及び硝酸の調査結果から亜硝酸性窒素及び硝酸性窒素を計算で求めたものを下図に示します。

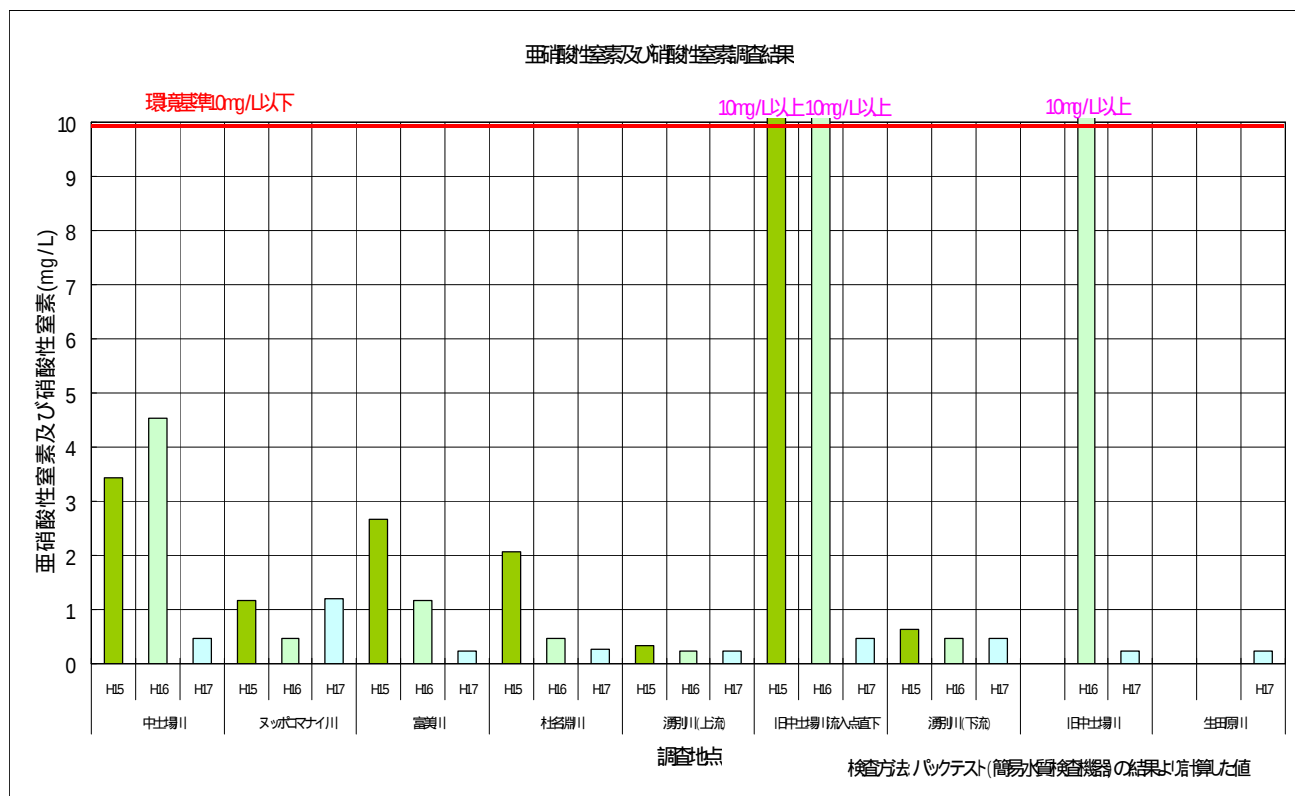


図 0-10 各地点における亜硝酸窒素および硝酸性窒素
(本年度および平成 15 年度からの調査結果)

- ・調査結果では、前述したとおり ヌッポコマナイ川の値が高くなっており、人為的な影響が懸念されます。
- ・その他の地点では 0.2～0.5mg/L となっており、過去 2 年に比べて低くなっています。湧別川本流では上流よりも下流の値が高くなっています。
- ・平成 16 年度における中湧別橋の値（網走開発建設部 管内一級河川水質速報値）を見ると、4～6 月における亜硝酸性窒素および硝酸性窒素で 0.249～0.627mg/L となり、周辺に位置している調査地点 湧別川下流はこの範囲内の値となっています。

まとめ

・魚 類

6科9種の魚類が確認されました。

確認数が多かったのはウグイとフクドジョウで、その他貴重種であるシベリアヤツメやハナカジカなども確認することができました。

・底生動物

20科30種が確認されました。

環境省・全国水生動物調査の水質指標判定によると、調査地点の水質は()
きれいな水～()少し汚れた水の判定になりました。

・水 質

昨年度に引き続き、湧別川本流に比べて支流の水質の汚濁が進んでいることが懸念されますが湧別川本流は比較的清潔な水質であると思われます。

支流の中で最も汚染が進んでいるのは旧中土場川で中土場川、ヌッポコマナイ川、富美川、社名淵川についても注意が必要です。

旧中土場川はCOD、リン酸、アンモニウムの値が異常に高く人為的な汚染と判断できます。

社名淵川のアンモニウムが昨年度と比較すると若干高く直上流の下水処理場による可能性も考えられますが、パックテストの操作で標準色との比較に個人差があるため、発色が進んで実際よりも数値が高くなっていることも考えられ、比色操作の方法については習熟が必要です。

